

公立高校運動部の教師の指導性と生徒の指向性に関する研究 —宮城県内ラグビー部の活動から—

白鳥 直人 勝田 隆

キーワード：運動部活動，教師の指導性，生徒の指向性

A study about teachers leadership and student personalities in sports clubs
— Based on a rugby club in Miyagi —

Naoto Shiratori Takashi Katuta

Abstract

The athletic club activity of a school is performed as part of an educational activity (educational means). However, the activity has many which were turned to the convention which exists as a game sport, and ambiguity is in an actual aim and actual positioning. From such a thing, I grasped leadership of a teacher in club activities and personalities and an activity satisfaction degree of a student and considered leadership of a better teacher.

Use leadership PM theory Misumi (1966) about leadership and a satisfactory degree "used "a classification of the personalities that a member of sports group of Sekioka (1972) had" about directivity of a student, and grasped each".The examination method searched for all the contents by reply of a student using question paper. Objects are a public high school Rugby part in Miyagi, and the high school (16 teachers) of 16 and 234 students. From results of an examination , it was as few as four teachers of PM type instruction validated, and there were many pm types with which an effect is the hardest to see as six persons. For the teacher who expects from the result which divided into the teacher who expects the present teacher and was investigated, PM type was eight persons, M type was eight persons, and P type and pm type were 0. The big difference was seen in M function about group maintenance by the teacher who expects the present teacher.

In addition, I continue to think it required to investigate continuously and to see a teacher's leadership, for a teacher to also analyze a student's personalities and to see agreement nature with a student's reply result, etc.

Key words: sports clubs, teachers leadership, student personalities

I. はじめに

学校現場における運動部活動（以下、部活動）は、学校の教育活動の一貫として行われている。そのためその活動は、単に競技スポーツとして競技力向上を目指そうとするものではなく、よりよい「人間形成」のための教育的手段として、そのねらいや位置づけがされている。

しかしながら現状の活動は、どの種目の部活動においても学校体育連盟等が主催する大会を目指したものであり、大会においてどのような結果（成績）をねらうかが活動の柱（目的・目標）になっていると思われる。つまり、学校の教育活動の中でよりよい「人間形成」を目指す一つの手段として部活動があるものの、教師たちはそれだけをねらいとせず、各大会での競技力発揮にむけた「競技スポーツ」的な面からも指導にあたるわけである。学校の現状としては必ずしもすべての運動部に専門的技術指導の可能な教師が配置されているわけではないが、少なくとも教師自身もそのスポーツを経験し、指導にあたっている場合は、より高い競技力、より上位の成績を目指した指導にあたっていることが多いと思われる。

部活動現場における指導について久保（1998）は、「教育的／競技的二重空間において・・・教師であると同時にコーチであることを求められるのである・・・この重なりあいの部分で教師であるのかコーチであるのかが常に問われているのである」とし、「教育者としての行動とコーチとしての行動の二重性の現実に立ち向かわなくてはならない」と論じている。さらに、教育的／競技的二重空間において指導にあたる教師を「教師／コーチ」と表し、「進学や就職に役立つ現実を提示するのも教師／コーチであり、逆に競技スポーツに専念するよう誘導するのも教師／コーチであり、学業へと導くのもまた教師／コーチである。そして教師／コーチが意識的、あるいは無意識的にその方向を示している」としている。大会参加において、この大会で活動を退く3年生を選手として使おうか、パフォーマンスレベルの高い他の生徒を使おうかなどと悩むケースはよく見られるが、まさに競技スポーツとしての活動の中に、教育的な配慮や効果を視かせる、教師としての指導ではないだろうか。

このように部活動の指導にあたる教師たちは、学校の教育活動という大枠から外れることなく、競技スポーツとして指導に取りくむという、部活動現場ならではの指導や活動の難しさを抱えているように思われる。

また部活動の現状として、指導にあたる教師が指導方針（目的、目標、練習内容等）を掲げ活動していることが多い。これはとすれば、教師自身が経験した練習方法やその部に伝統的に残る練習形態を行っているだけであったり、あるいは代表チームの模倣的練習を行うことなどで自己満足の指導に陥りやすいと思われる。さらに指導する教師が大会において好成績を上げることに意識がいきすぎれば、学校の教育活動という枠から外

れ、選手育成のための指導や、勝つことにのみ価値があるような活動になりやすい。また逆に、教育的指導（礼儀や態度）のみが重視されるような傾向が強ければ、スポーツそのものの楽しさや醍醐味を味わえなくなる可能性も高いと考えられる。部活動に参加してくる生徒たちは程度の差はあれそのスポーツそのものに触れること、自己の競技力を向上させることを目的とし、入部するものが多いと思われる。しかしそこで指導にあたる側の教師は、生徒がどのような目的を持ち、どのような思いで活動しているか、または教師の指導をどのように感じているかなどについては、意外に意識が低いように感じる。

スポーツ現場におけるコーチングについて勝田（2002）は、「自己の経験上の理解や欲求に基づいた個人的な思い込みだけで、スポーツの価値をプレーヤーに押しつけようとするならば、プレーヤーが指導者やコーチの欲求を満たす道具として扱われることもあり得る。この点からも指導するという行為は極めて危険な行為となる可能性もある・・・指導にあたる者は絶えず自分自身を客観視することが重要である」と指摘している。

これらのことを踏まえ本研究では、部活動現場における教師の指導性と生徒の指向性、さらに活動満足度についても調査し、よりよい教師の指導性を考察するものである。教師の指導性については、教師自身が自己の指導についてどう考えているか、という自己評価からではなく、「指導を受けている生徒たちから見た教師の指導行動」という面から考察をしていく。特に今回は、宮城県内の公立高校ラグビー部で指導にあたる教師と、その部に所属する生徒（部員）たちを調査の対象とし、今後の部活動指導に役立てようとするものである。

また、「教育的手段として部活動を行うこと」、逆に「競技スポーツの要素を持って活動を行うこと」を否定するものではないことを付け加えておく。

II. 実験

1. 調査方法

調査対象とした宮城県の公立高校20校のラグビー部に、郵送法により質問紙調査を実施した。質問紙は全部で93項目あり、内容は以下のとおり大きく4つに分けられる。

- ①現在の教師の指導性について（24項目）
- ②活動の満足度について（5項目）
- ③生徒の指向性について（40項目）
- ④生徒が期待する教師の指導性について（24項目）

すべての項目を被指導者（生徒）が記入するため、①については日頃指導を受けている教師について被指導者が評価し記入する形となる。また①と④は全く同じ質問内容であり、現在の教師と、生徒が期待する教師とを比較検討するようにしている。②、③については生徒個々の活動満足度と性格について見るものである。このよう

な点から、よりよい教師の指導性を考察する。

また①と④は全く同じ質問項目であるため、①を記入したあと④について記入することは、(現在指導にあたっている) 教師に対する遠慮や気遣いが見られることも予想される。そのため質問紙の順番を、現在と期待する教師に関するもの間に、自身に関する内容のものを入れ、できる限り直接比較しながら記入をしないように作成した。さらに依頼した各校の教師あてに、生徒が記入する際、教師の目を気にせずに行えるようできる限り「場の設定」を配慮してほしいことも、文面にてお願いした。

調査の期間は、平成 17 年 6 月 20 日から同年 7 月 4 日の間で、各校ごとに実施を依頼した。調査対象は 2, 3 年生のみとしたが、これは上記に述べたとおり、指導を受けている教師について被指導者が評価、記入する項目があるため、活動を始めて 2 ヶ月程度の 1 年生には的確な判断が困難と考えたからである。

2. 質問紙調査の内容

①教師の指導性について

教師の指導性とはその教師がとる「リーダーシップ行動」と捉えるが、教師の指導性や資質などについて、それらをどのようなものさしでみるかということになると、具体的、一般的な測定尺度はないように思われる。そこで本研究では、指導性を見る手段として、三隅 (1966) の「PM 式リーダーシップ論」を指示し、被指導者の評価によって PM 類型することにした。PM の P は Performance の頭文字をとったものであり、集団における目標達成や課題達成に関するリーダーシップである。PM の M は Maintenance の頭文字をとったものであり、集団の維持に関するリーダーシップである。どちらのリーダーシップ機能もバランスよく発揮される PM 型が最も有効とされ、さらに pM 型 (以下、M 型)、Pm 型 (以下、P 型)、pm 型に分類される。この 4 つの類型分けから教師の指導性を見る。(表-1 参照)

また三隅はおもに、企業の生産集団でのリーダーシップについて調査していたが、その調査の質問項目を、内容は変えずに部活動の指導場面に適用させ質問紙を作成した。たとえば「あなたの上役はあなたの方の仕事に関してどの程度指示命令を与えますか」などを、「あなたの指導者はあなたの方の活動に関してどの程度指示命令を与えますか」のようにした。回答はすべて 5 段階の評価尺度であり、上記の質問内容であれば、5. いつも与える、4. かなり与える、3. 時々与える、2. あまり与えない、1. 与えない、の中から回答する。質問項目は全部で 24 項目あり、課題達成機能 (以下 P 機能)、集団維持機能 (以下 M 機能) に関する質問がそれぞれ 12 項目である。

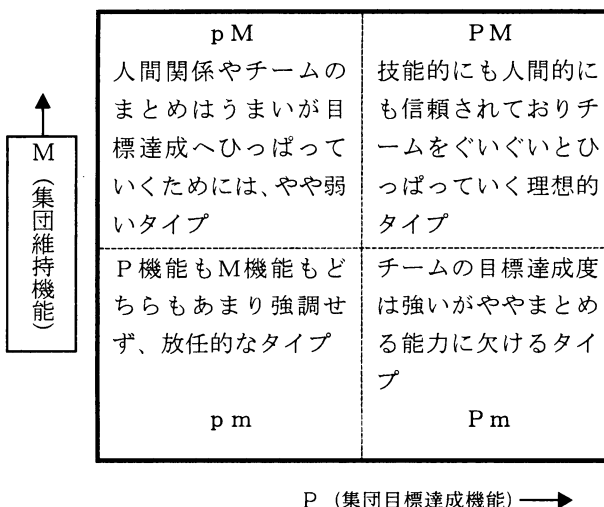


表 1 リーダーシップの型 (三隅, 1966)

②活動満足度について

三隅の PM 式リーダーシップ論では、PM 類型と仕事満足度、会社や給与満足度との関係などを見ている。本研究の活動満足度については、教師の指導性と同様に、仕事満足度に関する質問項目を、内容は変えずに部活動の指導場面に適用させて作成した。質問内容は 5 項目で、評価尺度は同じく 5 段階である。

③生徒の指向性

関岡、市村 (1972) による、「スポーツ集団の成員が持つ指向性の分類」を用い、ラグビー部の生徒たちの性格を見る。質問項目は 40 項目あり、各質問項目は「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 7 段階の評定によって回答を求め、ここから 5 つの性格に分類する。また本研究において関岡らの「指向性の分類」を指示した大きな理由は、分類された性格ごとにその指導法についても考察していることにある。質問紙において単に生徒の性格を分類、把握することで終わらず、教師たちが実際にどのような指導をすべきかという点においても、大いに参考になるものと考えたからである。なお分類する 5 つの性格は以下のとおりである。

・伝統指向型

まじめでおとなしいタイプ。よく練習する割にはよい成績があがらない。練習が形式主義で目標に向かった一貫性に欠ける。自発性に欠ける全体としては平凡な部員。

指導について、あまり苦勞をしないですむタイプ。こつこつ練習はするが、自分の枠を破ることができれば一流の選手となることも可能と考えられる。練習の場の設定や、一步高い目標を理解させることによって解決する必要がある。

・他人指向型

欲求不満が多いタイプである。部員としては取り扱いが難しいタイプである。自分の考えに全体が動いている

ような時は大変な力を発揮し、そうでない場合には、全体の方向とは逆の動きをすることが見受けられる。部員のリーダーとしては不適切な傾向がある。

指導について、個人としては指導が容易であるが、全体の中では大変難しいタイプであるので、全体の枠の中から個別に取り出して細かい指導を行う必要がある。ただし、支えるのではなく、引き出すという型の指導の方が好結果をうむ。

・自律的内部指向型

おとなしく、物事を着実に処理していくタイプである（几帳面）しかし、内部的には、かなり強い面もあり、自分で納得できない面についてはずぼらな行動をとることもある。しかし、強引に引っぱれば、それに答える力を持っており選手としては強い者が多い。

指導について、一人でもよく練習するタイプなので、あまり手がかからないが、ややもすれば自己の方針のみで事を処する傾向があるので、目標の立て方や練習の方法等について、あまり細部にわたらない主要なポイントの指導が必要である。

・権威主義的タイプ

一見まじめに見えるが、ぐうたらな面も多い。総じて一人っ子やぼんぼんが多く、部員としては不向きなタイプといえる。しかし、自分が納得していれば、練習や試合でもかなりの活躍をする。

指導について、選手のいうことを聞いてやるふりをしてながら、ぐいぐい引っぱっていく指導法が効果をあげるようである。こつこつ積み上げるタイプではないので、強くしようと思えばかなり手をかけなければならない。

・孤立的内部指向型

まじめでおとなしいタイプである。物事を几帳面に処理するが、疎通がきかず、そのためよく文句を言う。しかし、自己体位の行動をとって集団を混乱させることはない。

指導法について、練習についても平均的というか平凡なものである。重点的な方法を用いる指導を行う必要がある。

3. 評価結果の見方

各内容の結果は、おもに活動状況、競技成績などで分けて見てみる。活動状況は、部員数をもとに単独で15人制の試合に出場可能な高校と、部員数が少なく不可能な高校に分けた。さらに、単独で15人制に出場できた高校は、大会においてベスト4に進出した学校とそれ以外に分けた。このように分けた理由としては、15人にみえない学校の場合、大会そのものに参加するのか、単独で7人制に出場するのか、合同チームで15人制に出場するのかなどの選択があり、それぞれの教師および生徒の考えのもとに活動がある。単独で15人制に出場可能な高校は、大会には参加するものとして普段から活動

している。さらにベスト4に進出すると、上位の大会（東北大会）への出場チャンス（現在は上位3校）があり、より競技レベルの高いところで試合経験ができる。よってベスト4進出とは、仮に優勝はできなかったとしても東北大会参加が狙える、という一つの目安（目標）にもなる。実際に参加できている、またはベスト4に進出している高校は日々競技力向上を目指して活動し、その競技力も県内では上位にあるということはいえる。

なお、部員数や大会への参加状況並びに成績は、質問紙調査実施の約1ヶ月前に行われた「平成17年度宮城県高等学校総合体育大会ラグビーフットボール競技（以下総体）」時のものを見ている。

Ⅲ. 結果と考察

1. 内容別に見た結果と考察

対象とした宮城県内の公立高校20校に質問紙調査を実施した結果、16校、234名の生徒からの回収が可能であった。内容別に見た結果と考察は以下のとおりである。

①現状の教師と期待する教師の指導性について

現状の教師（以下、現状）と生徒が期待する教師のPM類型（以下、期待）は表2のとおりである。現状ではPM型が4人、P型が2人、M型が4人、pm型が6人であった。被指導者側（生徒）から見る評価にはややバラツキが見られ、P機能、M機能とも弱いpm型が最も多く、全体の37.5%であった。これに対し期待では、PM型が8人、M型が8人、P型とpm型は0であった。目標の達成を目指す活動ながら、同時に部の雰囲気やまともにも望んでいるPM型か、部集団がよりよい雰囲気のもと活動することを望んでいるM型かを期待している。また、現状よりP機能を期待する学校（生徒）はなかったが、P機能もM機能も弱いpm型を期待する学校もみられない。

表2 現状と期待する教師のPM類型

型	現状	期待
PM	4	8
P	2	0
M	4	8
pm	6	0

②現状の教師と生徒が期待する教師の比較

P機能、M機能の全体平均値をもとに、現状と期待を、P機能、M機能ごとに比較して見る。（表3-1参照）比較は片側T検定を用い、有意差を見た。その結果、P機能に関しては、現状と期待とに有意差は見られず、M機

能に関しては有意差が見られた。(自由度 15, T 値 - 8.81, t境界値片側 1.735) さらに表3-2のように, M機能に関して, その評価項目となる 12 項目それぞれを, 現状と期待とで比較した。

表3-1 現状と期待の比較

P機能 比較		M機能 比較		
全体平均	現状 P	期待 P	現状 M	期待 M
	3.134	3.249	3.26	3.82
自由度	15		15	
t 値	-1.618		-8.814	
P(T<t)片側	0.0632		1.28E-07	
t境界値片側	1.753		1.753	

表3-2 現状と期待の比較

M項目	現状平均	期待平均	自由度	t値	P(T<t)片側	t境界値片側
13	2.81	3.69	15	-5.969	1.29E-05	1.753
14	3.08	4.02	15	-7.916	4.91E-07	1.753
15	3.82	4.15	15	-3.969	0.0006174	1.753
16	3.45	3.9	15	-4.965	8.47E-05	1.753
17	3.15	3.68	15	-4.37	0.0002745	1.753
18	3.07	3.81	15	-7.041	2.00E-06	1.753
19	3.88	4	15	-0.87	0.199	1.753
20	2.75	3.33	15	-5.729	2.00E-05	1.753
21	3.3	3.86	15	-5.455	3.32E-05	1.753
22	3.26	3.75	15	-5.785	1.80E-05	1.753
23	3.45	4.03	15	-5.648	2.32E-05	1.753
24	3.08	3.75	15	-7.626	7.72E-07	1.753

※項目番号は質問紙番号

その結果, 12 項目中 11 項目で差が見られた。差が見られなかった 1 項目は, 現状の値がもともと他の 11 項目に比べても高く, 差が見られていない。その質問項目の内容は「あなたの指導者はあなたが優れたプレー (行動) をしたときにはそれを認めてくれますか」という内容である。つまり, その都度よいプレーをした時には褒めてくれるが, 他の質問項目で聞かれている, 「信頼」であり「支持」であり, 「公平」さであり「将来への気配り」などでは物足りなさがあり, それらを期待されている, という捉え方ができる。さらに, 現状と期待を PM 類型から比較してみると, 表4のとおりになり, 以下のようなことが考えられる。

表4 現状と期待のPM類型の比較

番	学校	現状類型	期待類型
1	A	PM	PM
2	B	PM	PM
3	C	P	PM
4	D	pm	M
5	E	PM	PM
6	F	P	M
7	G	pm	M
8	H	pm	M
9	I	PM	PM
10	J	M	M
11	K	pm	M
12	L	M	PM
13	M	pm	PM
14	N	pm	M
15	O	M	PM
16	P	M	M

現状の教師がPM型の4校は, いずれもそのままPM型を期待している。現状がP型の2校は, PM型とM型を望んでいる。現状がM型の4校は, PM型を望むのが2校, そのままM型を望むのが2校であった。もっと目標達成のための指導にあたってほしいと思う高校と, 現状よりさらに部の雰囲気や状態がよくなればと思う高校とに分けられる。現状で6校と最も多いpm型では, 1校がPM型, 5校がM型を望んでいる。1校はP行動に関しても望んでいるが, 各校の平均値からも分かるように, すべての高校がM機能に関して強く望んでいることがわかる。

③活動満足度

各校の満足度は表5のとおりである。A (満足) と判定された高校は3校, B (普通) が10校, C (不満) が3校であった。半数以上の高校が満足でもなく不満でもなく, 「まあ, こんなもんだろう」といった感覚で活動しているものと思われる。

競技成績や活動状況別で見た場合, ベスト4進出の3校のうち2校がA, 1校がB, 単独で15人制に出場した高校7校では1校がA, 6校がB, 部員数が15人にみない学校6校では, Bが3校, Cが3校である。全体でAとなった3校中, 大会において上位進出を果たした高校2校にAが見られ, 日頃から競技人数にみない高校においてはCが多く見られる傾向がある。

表5 各校の活動満足度

番	学校	満足度	活動状況、 競技成績
1	A	A	ベスト4
2	B	A	
3	C	B	
4	D	B	単独 15人
5	E	B	
6	F	B	
7	G	B	
8	H	B	
9	I	B	
10	J	A	
11	K	C	15人 未滿
12	L	C	
13	M	B	
14	N	C	
15	O	B	
16	P	B	
全体平均		3.49	
SD		0.39	
平均+SD		3.88	
平均-SD		3.1	

④指向性について

被指導者 234 名の指向性は、表6のように分類された。

表6 生徒の指向性の分類結果

判定別	1. 伝統	2. 他人	3. 内部	4. 権威	5. 孤立	他
全体	13.68	14.96	6.41	29.91	18.38	16.67
ベスト4	20.78	12.99	6.49	22.08	18.18	19.48
15人制 単独	11.02	18.64	7.63	32.2	18.64	11.86
15人未滿	5.13	7.69	2.56	41.03	20.51	23.08

「一見まじめに見えるがぐうたらな面も多い。納得していれば練習や試合でも活躍をする」権威主義的タイプが最も多く、自律的内部指向型が最も少ない。他はほぼ同じ数値でバラツキが見られる。ベスト4進出の3校を全体と比べてみると、権威主義的タイプが減り、「まじめでおとなしい。こつこつ練習はするが、自発性に欠ける」伝統指向型の生徒が増えている。単独で15人制に出場した高校7校では、「欲求不満が多く取り扱いが難しい。意欲や取り組みにむらが見られる」他人指向型に増加が見え、権威主義的タイプもやや増えている。部員数が15人にみえない学校6校では、権威主義的タイプが圧倒的に増えている。

2. 全体的な考察

現状の教師では、P機能、M機能のバランスがとれ、最も効果があるといわれるPM型が4人と少ない結果であった。しかし、活動満足度や活動状況、競技成績別にみた結果からは、効果が得られている指導ととることができる。逆に指導効果が低いpm型が最も多く、6人であった。またpm型では活動満足度を普通としているのが4校、不満としているのが2校あり、満足としている高校はない。活動状況や競技成績の面からみれば、ベスト4などの上位までは進出していないが、単独で15人制に出場できている高校が3校、部員が15人にみたくなく、合同チームもしくは単独7人制に出場している高校が3校である。(表7参照)この中には、以前大会においてベスト4や決勝まで進んでいる学校もあれば、教師がその学校に赴任し部員数が増え始め、大会に出場してきた高校もある。おそらく活動のねらいや明確な目標が教師から伝わっていないことや、あるいは理解していないまま漠然と活動に取り組んでいることなどが原因と考えられる。そして専門的技術指導の不足、集団をまとめようとする行動の不足なども考えられる。

また三隅(1966)によれば、企業における生産性は特に短期間になればPM型の次にP型に効果が見られ、他項目の満足度や監督者への信頼度などではPM型、M型、P型の順に効果がみられるとされている。このことをもとに部活動を見た場合、P型が比較的大会などで結果(成績)を出しやすいとも考えられる。これは、毎年部のメンバー構成が変わり、新たなメンバーで大会に臨んでいく現状は、限られた期間の中で結果(成績)を出さなければならぬ指導方法になりやすいこと、仮に結果が出せなかったとしても、出そうとすることが教師主導型の指導になり、P型が強くなるのでは予想されたからである。しかし、今回の調査結果ではP型は2人と少なかった。活動満足度はいずれもBであるが、ベスト4に進出している高校が1校あり、調査後の大会においても同様の結果を残していた。ちなみにこの高校においては、数年前までは15人揃うかどうかという部員確保に苦しんでいたが、別の教師が赴任後、部員を増やし大会で好成績を出し始めてきたところである。さらに上位を目指し頑張っていることと思うが、このような背景からもP機能が強く出ることが推測できる。逆に、これまで部員も比較的多く、大会でも好成績を残せていた高校が、近年部員の減少が目立ち、大会においても思うようなパフォーマンスが出せないようであれば、競技力の向上をねらうため、現状以上のP機能を求めることも考えられる。このようなことは本研究の調査結果からは明らかにできないが、入部してくる多くの生徒が高校からラグビーを体験することを考えれば、指導者の方針や活動内容がその生徒の「ラグビー観」、または「部活動観」となることは十分に考えられることである。よって、活動の

表7 全体的な調査結果

番	学校	タイプ		満足度	活動状況 競技力別	指 向 性					
		現状	期待			伝統指向	他人指向	自立的内部	権威主義	孤立的内部	他
1	A	PM	PM	A	ベスト4	16.47	16.47	8.24	22.35	17.65	18.32
2	B	PM	PM	A	ベスト4						
3	I	PM	PM	B	単独15						
5	E	PM	PM	B	単独15						
4	C	P	PM	B	ベスト4	14.29	23.81	9.52	26.19	11.9	14.29
6	F	P	M	B	単独15						
7	J	M	M	A	単独15	4.17	8.33	8.33	50	20.83	8.33
8	L	M	PM	C	15未満						
9	O	M	PM	B	15未満						
10	P	M	M	B	15未満						
11	D	p m	M	B	単独15	12.05	10.84	2.41	34.94	22.89	16.87
12	G	p m	M	B	単独15						
13	H	p m	M	B	単独15						
14	K	pm	M	C	15未満						
15	M	p m	PM	B	15未満						
16	N	p m	M	C	15未満						
全体平均						13.68	14.96	6.41	29.91	18.38	16.67

ねらいや目標を明確に提示すること、ラグビーそのものの魅力を伝えられることが必要と思われる。また、目標を達成するために何をすべきかを気づかせ支援すること、日々の活動の「小さな成功」を見逃さず、そのことを仲間たちも理解できるようにしてあげることなどが、P機能、M機能のバランスがとれた指導に結びついていくのではないだろうか。

さらに期待する教師の面からも見てみると、PM型の教師の下ではPM型を望んでいる。これは満足度や競技成績の面も含めて見ても、PM型の指導にはある程度の成果が得られているものと考えられる。それ以外の型ではPM型かM型を望んでいる。これはチームの雰囲気や状況をよりよくと望んでいるか、それに加え現状以上の専門的技術指導をも望んでいるか、と捉えることができる。いずれにせよ、期待する教師の、M機能に関する項目のほとんどで現状とに大きな差があったことは、一言でいえば「もっとかまってほしい」という生徒一人一人の意思表示ととることができる。多忙の中、可能な限り部活動の指導にあたっていることは思うが、一方通行的な指導に陥らず、もっと生徒個々と接する機会や時間を増やし、関わりをより多く持つことが望まれている。この点のみに関して言えば、リーダーシップのあり方と

いうよりは、「コミュニケーション」の取り方がどうあるべきかということにもなるが、教師のリーダーシップ行動として「コミュニケーション」のあり方が重要であるといえる。よって教師ができる限り明確に、生徒一人一人の性格、つまり指向性を把握することが、日頃の指導において、コミュニケーションの取り方において重要なポイントにもなる。ラグビーのようなチーム練習主体の活動の場合、個々の指向性に合わせた指導というものは難しい現状もある。しかし、個々の特徴を的確に捉え、そこに教師それぞれの指導の工夫を見出すことが必要であろう。

IV. まとめ

本研究は公立高校運動部活動における、教師の指導性と生徒の指向性について、活動満足度の点も含め調査し考察したものである。教師の指導性と活動満足度は三隅（1966）の「PM式リーダーシップ論」を用い、指導性は現状の教師と生徒が期待する教師とに分けて調査した。生徒の指向性は関岡（1972）らの「スポーツ集団の成員が持つ指向性の分類」を用いた。調査対象は、宮城県内の公立高校ラグビー部16校、234名の生徒であり、その結果は、①現状の教師では、指導の効果が最も

高いとされるPM型が4人と少なく、逆に効果の低いpm型が6人と一番多かった。これに対して期待する教師については、PM型が8人、M型が8人、P型、pm型が0であった。現状に比べ、PM型、集団維持機能の高いM型の指導が多く求められている。

②活動満足度では満足と判定した高校はわずか3校であり、他は普通10校、不満3校であった。PM型の指導のもとに比較的満足感が得られている。P型、pm型の指導からは満足感が得られておらず、特にpm型では不満が出る傾向が見られる。また、このP型、pm型は、上記のとおり期待する教師においては0という結果の型である。③生徒の指向性では5つのタイプのうち、権威主義的タイプが最も多かった。PM型の指導のもと、または競技成績で県大会ベスト4以上の成績を残している3校では、権威主義的タイプが減り、伝統指向型のタイプが増加傾向にある。pm型の指導のもとでは全体平均と比べさらに権威主義的タイプの割合が増えている。より適切なコミュニケーションをとるためにも、生徒個々の性格を的確に把握し指導にあたるのが重要である。

④現状の教師と期待する教師との比較では、P機能(課題達成機能)に有意差は見られなかったが、M機能(集団維持機能)には大きな差が見られた。生徒からの「もっと目を向けてほしい」という意志の表れともとれ、そのことが集団の雰囲気やまとまりに結びつくものと考えられる。

学校現場における教師は、経験上、自身の指導力に関して評価される機会は少なく、部活動の指導においては安易に大会結果のみで評価されがちである。また、自身の指導がどうなのかと捉えてみても、それを見ることのできる一般的、具体的な評価項目やデータなどはほとんど見られず、教師の自己評価の意識も低い。

本研究はこのような現状の中で指導経験を重ねている教師について、現状の指導はどうであるかを見たものであり、生徒が期待する教師や生徒自身の指向性などの点からも考察を加えることで、よりよい指導を探る手がかりとした。さらには、実際に指導を受けている生徒側が教師の指導行動を評価したことも注目すべき点である。

なお今後の課題としては、よりよい教師の指導性や部活動の在り方を見るために、活動の中心的役割を担うキャプテンや部長のリーダーシップ行動も調査することや、教師が生徒一人一人の指向性を考察し、生徒自身が行った結果と比べ、合致性を見ることなどが必要と考える。さらには、(学校現場の教師に限らず)指導性、すなわちリーダーシップ行動は「変化」するものであり、特にその行動効果の低下には(指導者の)自覚症状はないといわれていることから、同様の調査を継続的に行っていく、できる限り自己の指導を客観的に見ていくことが大切と考える。

V. 引用・参考文献

- 葉養正明 (1993) : 新特別活動の研究, 紫峰図書
 平尾誠二 (1996) : 勝者のシステム, 講談社 p70,71
 堀洋道・吉田富二雄 (2001) : 心理測定尺度集Ⅱ, サイエンス社 pp.246 - 259
 河合隼雄 (1998) : こころの処方箋, 新湖文庫 pp.110 - 111
 勝田隆 (2002) : 知的コーチングのすすめ大修館書 pp.15 - 17, pp.19 - 21
 木村清人・戸田芳雄 (2000) : 高等学校新学習指導要領の解説保健体育, 学事出版
 久保正秋 (1998) : コーチング論序説, 不昧堂出版
 桑野豊・佐伯聰夫 (1988) : 現代スポーツ指導者論, ぎょうせい pp.101 - 107, pp.159 - 162
 小林晃夫 (1991) : スポーツマンの性格, 杏林書院
 松田岩男・宇土正彦 (1988) : 学校体育用語辞典, 大修館書店
 三隅二不二 (1966) : リーダーシップの科学, 講談社
 三隅二不二 (1984) : 新しいリーダーシップ, ダイアモンド社
 森川貞夫・遠藤節昭 (1989) : 必携スポーツ部活動ハンドブック 大修館書店文部省 (1989) : 高等学校学習指導要領
 文部省 (1989) : 高等学校学習指導要領解説保健体育編・体育編
 文部省 (1999) : 高等学校学習指導要領解説特別活動編
 文部省 (1982) : 特別活動をめぐる諸問題 pp.161 - 166
 文部科学省 (1999) : 高等学校学習指導要領
 永田靖章 (1998) : スポーツ集団のマネジメント, ぎょうせい
 岡野進 (2003) : 概説スポーツ, 創分企画 pp.11 ~ 15
 大西鉄之佑 (1999) : 闘争の倫理, 中央公論新社 pp.185 - 194
 関岡康雄・市村操一 (1972) : 体育学部紀要第11巻, 陸上競技選手の社会的性格に関する研究, 東京教育大学体育学部 pp.135 - 143
 関岡康雄 (2004) : コーチと教師のためのスポーツ論, 道和書院 pp.5 - 7, pp.60 - 63
 スポーツ心理学の世界, 福村出版 pp.168 - 171
 スポーツ健康課 (松坂) (2005) : 平成17年度宮城県高等学校運動部指導者研究協議会兼研究大会配付資料
 竹之下久蔵 (1972) : プレイ・スポーツ・体育論, 大修館書店
 丹羽劭昭 (1982) : スポーツと生活, 朝倉書店
 上田雅夫 (2000) : スポーツ心理ハンドブック, 実務教育出版